風疹ワクチン

国立感染研究所感染症疫学センター室長
多　屋　馨　子
（聞き手　池田志孝）

風疹ワクチンについてご教示ください。風疹の流行により40代の男性でワクチンを希望されている方に接種する場合、回数は１回でいいのでしょうか。もし、２回の場合は、間はどれくらいあけるのがいいのでしょうか。ワクチンメーカーの話では、成人だと知らない間に多少なりとも感作されているので１回でよいというところと、年齢に関係なく２回接種がよく、間は28日おけばよいというところがありました。小児の場合はMRワクチンで１歳と６歳と間がかなりあいていますが、どうなのでしょうか。

＜埼玉県開業医＞

池田　質問の主な内容は、風疹の流行により40代、これは30歳後半～40歳だと思うのですけれども、男性でワクチンを希望されている方に接種する場合、回数は１回でいいのでしょうかという質問です。その背景にあります、なぜこういった年齢の方が風疹ワクチンを受けなければいけないかということからお話をうかがいたいと思います。

多屋　日本では1977年から風疹ワクチンが定期の予防接種に導入されたのですが、当時は女子中学生だけが接種の対象でした。その理由は、妊娠初期に妊婦さんが風疹にかかりますと、おなかの赤ちゃんに影響が出てしまうからです。目や耳や心臓に障害をお持ちの赤ちゃんが生まれてしまう可能性があるということで、女性がまず予防しようというコンセプトで始まりました。しかし、残念ながら、女性だけがワクチンを受けていたのでは流行をコントロールすることができませんでした。何年かに１回、大規模な風疹の流行があって、それを止めなければ妊娠中の発症を十分予防することができないということがわかり、1995年からは１～７歳半までの男女幼児と、中学生も女性だけではなくて男性も一緒に受けよ

うということになりました。男女中学生、そして１～７歳半までの男女幼児が定期の予防接種の対象となりました。

でも、ここで大きく変わったことが１つありました。女子中学生だけが受けていたときは学校での集団接種で義務接種だったのですが、1995年の４月からは保護者と一緒にかかりつけの医療機関に受診して受けてくださいという個別接種に変わりました。幼児はお母さんやお父さんと一緒にかかりつけの先生のところに行って予防接種を受けるのは比較的できていたのですけれども、それでも十分な接種率ではなかったのです。逆に中学生はなかなか保護者と一緒に病院に行ってくれなかったため、実施率という計算方式ですが、10％台にまで激減してしまいました。

そんな背景の中、30年たった今、成人男性を中心に風疹が流行しているのですが、年齢は20～40代の男性、そして20代の女性が多く発症しています。今、34歳以上の男性は風疹のワクチンを１回も受けるチャンスがなかったと思うのです。でも、34歳～40代の男性は、学校でクラスの半分の女性がワクチンを受けていましたので、女性にある程度流行を予防してもらっていたのかもしれません。そのため今の30代、40代の男性はだいたい３～４人に１人は風疹の抗体が陰性です。その方々が今、風疹にかかっていらっしゃるので、30代、40代の男性がとてもたくさんかかっておられるのです。

20代の方は男性も女性も同じくらい風疹を発症しているのですが、それは中学校のときに保護者と一緒に病院に行って受けなさいと言われたのですが、行っていただけなかった方々です。その方々が今ちょうど20代になっていらっしゃる。そこで今流行が起こって発症している。そんな背景が今の風疹の流行にはあると思います。

23歳よりも若い方というのは、受ける年齢はばらばらですが、２回のワクチンの接種の機会がありましたので、こんなに流行していても、あまりかかっていないのです。2013年は、風疹患者報告数の９割が20歳以上という流行になっています。

池田　30年前の接種の方法論によって皮肉な結果が今起こっているということになりますね。

多屋　そうですね。

池田　遅くないから、予防接種を受けていない方は今からでもワクチンを打とうということなのですけれども、１回よりは２回打ったほうがいいということですね。

多屋　はい。１回ですと、どうしても抗体がつかない方がいらっしゃいます。その割合がだいたい５～10％の間ぐらいです。この方々は、primary vaccine failureといいます。より確実に免疫を獲得していただくためには２回接種のほうがいいということで、

2006年度から日本も２回接種制度を取り入れて、今の23歳よりも若い方はどこかで２回目のチャンスがある、そういう時代になっています。

池田　２回目を受けるということになりますと、１回目からどのくらいの期間をおけば十分免疫がつくのでしょうか。

多屋　１回目の接種で抗体がつかない方、いわゆるprimary vaccine failureの方に免疫をつけていただくという意味においては、１カ月以上あいていればいつでも大丈夫ということになります。だいたい数カ月あけて受けるという方が多いかなと思います。ただ、今皆さんが２回接種を受けられると、ワクチンの量が足りなくなるということもありますので、１回も受けていない方はまず１回受けていただく。そして、これから特に妊娠を希望されている女性についてはぜひ２回目を受けられて、２カ月は妊娠を避けていただく必要があります。その後妊娠を考えていただいたほうがより確実なのではないかなと思っています。

池田　ワクチン不足ということが昨今いわれていますけれども、現状としてはいかがなのでしょうか。

多屋　2013年の流行を受けて、多くの市区町村あるいは企業が風疹ワクチンの費用を助成してくださる施策が随分広がってきています。2013年４月、５月、６月と、５月は定期接種以外にも30万人を超える方がワクチンを受けてくださいました。６月に入って、ちょうど半ばぐらいだったでしょうか、このまま毎月30万を超える方が受けてくださると、秋以降に少しワクチンが不足してくるかもしれないということで、一度国のほうから通知が出ました。このままいくと、もしかしたら足りなくなるかもしれないという通知が出た途端に、一気に注文も多くなったようで、なかなか手に入らないという品不足感が起こりました。しかし、当時は休日も返上してワクチンをつくってくださいましたので、ワクチンの品不足はないということが厚生労働省から出ています。

2013年は定期の予防接種は210万人ぐらいのお子さんが受けたと思うのですが、定期以外に、任意の予防接種として250万人分ぐらいのワクチンが年度内につくってもらえるようなので、ぜひこのチャンスを逃さずに受けていただくことを考えてもらいたいと思っています。

池田　皆さんご存じなのは、妊婦さんが感染すると胎児が影響を受けるというのですけれども、具体的にどのような症状があって、どのくらいの患者さんがいらっしゃるのでしょうか。

多屋　妊娠の特に初期のほうが複数の症状をお持ちの赤ちゃんが生まれていらっしゃいます。妊娠１カ月で風疹にかかると半分ぐらいの赤ちゃん、２

カ月で35％、３カ月で18％、４カ月で８％ぐらいに影響がでるという数字がありますが、妊娠20週ぐらいまでに風疹ウイルスに感染して、ウイルス血症という状況がありますと、胎児に感染することがあります。ただ、100％の赤ちゃんに影響が出るわけではなくて、感染するのがだいたい1/3ぐらい、そのうち1/3ぐらいに何らかの症状が現れてしまいます。

実は風疹の流行は2012年の春から始まっていたのですが、2013年は随分多い数で、2012年１年間の６倍を超えるような数になっています。また、2012年からの流行の影響で、2012年の10月以降、2013年中に35人の赤ちゃんが先天性風疹症候群と診断されています。

池田　胎児のことを皆さん注目されているのですけれども、風疹にかかった患者さん自身の合併症としてはどのようなことがあるのでしょうか。

多屋　風疹の合併症としてよく知られているのは、風疹脳炎、あとは血小板減少性紫斑病だと思います。風疹脳炎を発症しますと、痙攣が頻発したり、あとはICUに入室されている方もいらっしゃいますが、2012年、風疹脳炎が５人、血小板減少性紫斑病が13人であったのが、2013年は風疹脳炎が13人、血小板減少性紫斑病が63人と、非常に多い数で合併症の報告もありますので、決して皆さんが軽く治るわけではないということは知っておいていただいたほうがいいと思っています。

池田　一度風疹と診断されると、検査を受けて、一定期間は家に閉じこもりがちですが、そういった方がいらっしゃるので、体調の不良があれば、もう一回医師に診ていただくことが必要ですね。

多屋　そうですね。風疹と診断されたからと侮ってしまうことなく、調子が悪かったらすぐに医療機関を再受診していただきたいと思います。

池田　風疹は自分もすごく影響を受けますし、胎児も影響を受けるということで、ワクチンを受けていらっしゃらない方はぜひ１回は受けるということが大切ですね。

多屋　そうですね。

池田　どうもありがとうございました。